

副鼻腔炎

ふくびくえん



K-style

医療図書館

Vol.68

2022 夏号

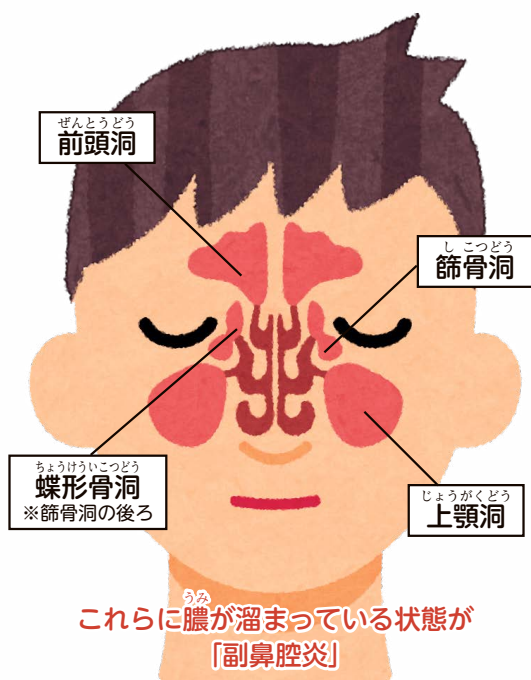
鼻（鼻腔）の周りには「副鼻腔（ふくびくえん）」と呼ばれる4つの顔面骨の空洞（上顎洞・篩骨洞・前頭洞・蝶形骨洞）があります。この空間内で炎症が生じ、膿汁が貯留している状態を「副鼻腔炎」といいます。多くは風邪などの上気道の感染を契機に、鼻粘膜から副鼻腔に炎症が波及することで発症します。他の原因として、顔面骨の外

副鼻腔炎とは



日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会耳鼻咽喉科専門医・指導医

耳鼻咽喉・頭頸部外科 医長 瀨本 真一



一般に発症から3か月以上遷延する副鼻腔炎のことを指します。副鼻腔の炎症を繰り返すことによって慢性化します。多くは細菌感染が原因となりますが、

慢性副鼻腔炎

一般に発症から4週間以内の副鼻腔炎のことを指します。症状としては鼻づまりや、ドロっとした臭いにおいのある鼻汁、後鼻漏、頬・鼻周囲・額の痛み、発熱などの症状を認めます。重症例では、顔面の皮膚や眼瞼（目の周囲）の発赤や腫脹を伴うこともあります。

急性副鼻腔炎

傷、水泳・潜水、航空機の着陸時などが誘因になることがあります。症状の持続期間によって急性副鼻腔炎・慢性副鼻腔炎に分類されています。

真菌（カビ）や齲歯（歯の感染が原因となるもの）、アレルギー性鼻炎に起因するものもみられます。近年では、一般的な慢性副鼻腔炎とは異なる病態を持つ難治性の「好酸球性副鼻腔炎」の患者さんが増えていきます。

好酸球性副鼻腔炎

慢性副鼻腔炎のうち、両側の鼻の中にポリリブ（鼻茸）が多発し、ポリリブや鼻粘膜に著明な好酸球浸潤を認めます。他の副鼻腔炎と同じく、粘稠な鼻汁や鼻づまりが主な症状ですが、特に嗅覚障害が強いのが特徴です。気管支喘息に罹患している方に合併することが多く、一部の解熱鎮痛剤に対してアレルギー反応を示すことがあります。ステロイド剤の全身投与が有効ですが、治療しても再発しやすく難治性です。また、鼻腔や副鼻腔の炎症が耳管（鼻の奥にある鼻腔と中耳をつなぐ管）を経由して中耳にまで波及し、中耳炎（好酸球性中耳炎）を合併することもあります。

副鼻腔炎が重症化し、副鼻腔の周囲に炎症が波及した場合に、目の合併症（視力障害・見えにくくなる・眼球運動障害・物が二重に見える）や頭蓋内合併症（脳膿瘍…激しい頭痛や発熱を伴う感染症）を引き起こす場合があるため注意が必要です。



副鼻腔炎の検査・治療方法

日本耳鼻咽喉科頭頸部外科学会耳鼻咽喉科専門医

耳鼻咽喉・頭頸部外科 医長 田所 宏章

副鼻腔炎の検査

- ・前鼻鏡検査…前鼻鏡という器具を用いて肉眼で鼻内を観察します。
- ・鼻腔内視鏡検査…ファイバースコープという細長いカメラを用いて、鼻腔内を詳細に観察します。鼻汁の性状や鼻茸の存在の有無を確認します。
- ・鼻腔通気度検査…鼻づまりの程度を評価します。
- ・基準嗅力検査…実際の匂いを嗅いでいただき、嗅覚障害の程度を評価します。
- ・画像検査…副鼻腔レントゲン撮影を行い副鼻腔炎の程度を評価し、副鼻腔CTや副鼻腔MRI検査を行いより詳細に病変の評価を行います。
- ・組織生検…鼻茸の一部を採取し、組織検査を行います。好酸球性副鼻腔炎を疑う場合は、鼻茸中に好酸球浸潤の程度を確認します。
- ・その他…血液検査や、アレルギー検査を行います。

副鼻腔炎の治療

副鼻腔炎の治療の基本は抗菌薬による治療



が必要です。また、去痰薬や抗アレルギー薬、噴霧式ステロイド点鼻薬を併用する場合があります。急性副鼻腔炎の場合には1週間程度の短期間抗菌薬を使用します。慢性副鼻腔炎の場合には抗菌薬を通常の半分の量で長期間内服する（マクロライド少量長期投与、3か月程度）を行います。好酸球性副鼻腔炎の場合はステロイドの全身投与を行う場合があります。

内服薬などの保存的な治療で改善されない場合には手術療法が必要となります。副鼻腔炎の原因が歯などの歯の感染が関連している場合は、歯科での抜歯などが必要となります。手術療法は鼻茸を切除し、副鼻腔内の病的な粘膜を可能な



副鼻腔炎チェックリスト

- ☐ 鼻づまりが続く
- ☐ 臭いにおいのする鼻汁
- ☐ 鼻汁がのどに降りてくる
- ☐ においがにびい
- ☐ 頬っぺたやおでこの痛み

もし気になる場所があったら…

当てはまる項目がある場合は、副鼻腔炎の可能性がありますので、早めに医療機関などでご相談ください。

限り切除します。また、副鼻腔を隔てる骨壁を取り除き、副鼻腔を広く開放し換気を改善し、貯留していた膿の排出を促します。以前は、歯茎を切開して頬の骨を削って行う手術が施行されていましたが、現在は内視鏡を用いて低侵襲に行う『内視鏡下鼻内副鼻腔手術』が一般的となっています。副鼻腔の手術と同時に鼻中隔（左右の鼻を隔てている壁）の彎曲を矯正し、粘膜下で下鼻甲骨を切除することで鼻づまりの改善を図る場合もあります。手術後は内服薬や点鼻薬を使用しながら、定期的に通院での鼻処置や自宅での鼻洗浄を行います。特に好酸球性副鼻腔炎は手術療法を行っても再発しやすく、術後のケアを継続して鼻内の炎症をコントロールしていくことが重要となります。

近年、さまざまな生物学的製剤が開発されてきており、一部の薬剤は鼻副鼻腔炎に対しても保険適応となり使用が可能となっています。前述の既存治療に抵抗性の鼻茸を伴う慢性副鼻腔炎（主に好酸球性副鼻腔炎）の方が対象となります。

